

# シンポジウム「畑作農耕文化の展開」の経過と概要

## 編集 部

### 1. はじめに

昭和53年、『農耕の技術』が創刊されてから、今年でちょうど10年目を迎えることになった。本誌第10号をその10周年の記念号とすることは、前号の「編集後記」でもふれているように、すでに昨年から構想されていた。しかし具体的な企画が始まったのは今年の4月、農耕文化研究振興会が新たに発足してからのことであった。

その企画にあたって、まず念頭にあったのは、アジアの稲作文化をめぐる研究の、現時点での到達点であった。アジアの農耕の中で重要な位置を占めるイネや稲作文化の問題について、この近年に格段に議論が深化してきたという認識がある。イネの起源や稲作の伝播、あるいは中国・朝鮮・日本を結ぶ、最近の考古学の成果をふまえた稲作渡来の問題、また実地調査に基づくアジア全体の稲作文化・技術の地域的特質や稲作発展史など、さまざまな研究分野の進展によって、アジア稲作文化の全体像がかなり鮮明になってきた。渡部忠世らによる『稲のアジア史』（全3巻）が現時点での稲作に関する諸問題をひとまず集大成できた背景には、このような関連諸分野の近年のめざましい進展があったからに他ならない。

稲作文化研究のこのような進展に対比すると、アジア農耕の中のもうひとつの大きな柱である畑作について、十分な論議が行なわれてきたのだろうかという問題も芽生えていた。そこには、稲作があまりに重要であったために、畑作の側面が等閑視されてきており、甚だ片手落ちと言わざるをえないような状況がアジア農耕文化の研究一般に共通する傾向ではなかったかという反省がこめられていた。『農耕の技術』の発刊10周年を記念する催しとして、アジアの中

の畑作農耕文化の諸問題をとりあげるシンポジウムを企画したのは、以上のような問題意識が背景としてまずあったといえよう。

ところで、畑作農耕文化をとりあげるとなると、どのような側面からこれに切りこんでいくかが問題になろう。アジア全体を見渡せば、畑作農耕の非常に卓越する地帯として、中国の華北やインドのデカン地方などがある。また、稲作に比べてマイナーとはいえ、さまざまなタイプの畑作（焼畑も含めて）がアジア各地で行なわれ、日本もその例外ではない。まさに畑作における地域的変異は、作物の多様性とも相まって、稲作をしのぐほどの複雑さと広がりをもっているといえよう。さらに、これに加えて歴史的な発展過程も含めて論ずるとなれば、論議を必要とする対象はきわめて多岐広汎にわたって收拾がつかねるおそれがある。けだし、このような状況のもとで、アジア畑作農耕文化の展開という大きな問題をただ1回のシンポジウムでこなしていくことは不可能な事であるにちがいない。

畑作農耕文化の諸問題を、今後、何回かにわけて総合的にとりあげていくことを考えた。今回をその第1回目として、次項の「シンポジウムのねらい」に述べる諸点に問題を絞って開催することに落ち着いた。将来、この企画がどのように展開をしていくかについては、いまだ十分な討議がつくされていない。しかし、今回のシンポジウムがアジアの畑作農耕のきわめて深遠にして複雑な内容の究明に当って、とりあえずの端緒となることは疑いえないところである。

1987年7月18、19日の両日に、7人の話題提供者による発表と総合討論というプログラムで、京都大学楽友会館で開催されたシンポジウムには、農耕の技術研究会会員その他を含めて、約100名という多数が参加し、初日の夕方の懇親会も含めて活発な報告と議論が展開された。

シンポジウムの話題提供と討論は全て記録として残されたが、本号には、誌面の都合で話題提供のうちの3つの報告のみを掲載することとした。その他の4つの報告については、本稿のなかで編集部によって簡単に論旨をまとめて紹介するにとどめる。また第2日目の午後いっぱいをかけて行われた総合討論については、その内容をいっさい省略した。討論の抄録ということの技術的な難

しさもあるが、あと1, 2回, この種のシンポジウムを行った上で, あらためて討議を記録した方がより大きな成果を期待できるであろうという編集部としての判断に基づいている。熱心に当日の討論に参加していただいた各位にご理解を賜りたいと思う。

## 2. シンポジウムのねらい

上記のような問題意識にもとづいて, どのような側面を今回のシンポジウムでとりあげるかが, 編集委員の一部および編集部メンバーであらかじめ論議された。そこでとりあげられた問題は多岐にわたっていたが, 少なくとも次のような論点が最初の試みとしては妥当な設定であろうとの一致をみた。

一つは, さまざまな畑作物のうち, 論議の対象を雑穀類に絞ろうという点であった。そして, この場合の雑穀類にはムギやマメを含めて論議しようという点でも一致した。このように対象作物を限定したのは, アジアの畑作農耕を考えるとときに, 雑穀類がきわめて重要な作物として成立している畑作地帯が多いこと, また, 畑作農耕の発展過程を考えてみたときに, 「稲作以前」の, あるいは「ムギ作以前」の雑穀類という問題設定が成り立つほどに, 過去において雑穀類の畑作に占める位置が重要であったことがあげられよう。そして, ムギ類やマメ類を雑穀類に含めて論議するのは, 畑作農耕の作物構成が, 通常, 雑穀とこれら作物類との複合として成立することが多かったことを考慮したからである。

第二の論点は, 畑作農耕の技術的側面である。アジアの畑作農耕をみるときに, 農法的に極めて発展を遂げた地帯として中国の華北地方と南インドのデカン地方をあげることができる。そこで, これら両地方の畑作農法の特徴を追って, アジアの畑作農法の発展過程を明らかにすることをねらいとした。そして, これには, 両地方の畑作農法の同質性と異質性を比較検討すれば, 西アジアから東アジアに至るアジア全体の畑作農耕文化の展開過程を鳥瞰するうえでも意義あることになろうとの期待も込められていた。

第三には, わが国への畑作農耕文化の伝播とその後の展開という問題である。

これについては、「稲作以前」の縄文農耕をどうとらえるか、そしてその淵源をどこに求めるのか、また華北に古くから発達した畑作農耕とわが国の畑作農耕との関係はどうか、あるいは、日本の畑作農耕の出発を従来から言われてきた照葉樹林文化の中にどう位置づけるのかなど、論点を相当古い時代に留めてみても、さまざまな問題点の浮かびあがってくるのが準備の段階から指摘された。

大まかには、以上のような三点を中心にシンポジウムを構成しようということになったものの、対象の時間的・空間的な広がり大きさ、あるいは雑穀類に限ったとはいえ、対象となる作物の種類多様さを前に、いったいどのような話題を具体的にとりあげていくのがよいか、なかなか決めかねる問題であった。結局、次に述べるようなプログラムとなったわけであるが、そのプログラム構成に至るまでには、ともかく、上記の三点のいずれかにもっとも詳しい方々を話題提供者に迎え、その発表のなかから、シンポジウム参加者がすくなくとも新たな刺戟をここから汲みとれる機会を今回はつくりたいと考えた。企画者側の最小限の期待であった。それはともかく、畑作農耕文化をアジア全体を視野に入れながら論じようとするとき、我々が持ちあわせている材料、あるいは共通の論議の基盤がいかに脆弱なものであるかを再確認しなければならなかった。これが、準備段階での我々の痛切な印象であった点は強調しておいてよいだろう。

### 3. シンポジウムの経過とその概要

#### (1) シンポジウムの構成

論点を以上のように絞ることによって、シンポジウムの話題提供を次のような柱に基づいて設定することにした。第一には、作物としての雑穀類の起源と伝播、第二には、アジア畑作農法の最も発展した形態としての華北農法と南アジア農法の特徴、そして第三には、日本の初期畑作の実態と現在から照射した歴史の残像としての畑作民俗事例、である。

この柱に沿って、次のような話題を設定した。以下、話題提供の順に提供者

の氏名とタイトルを列挙すると次のようである（以下敬称を略す）。

阪本寧男（京都大学農学部）：ユーラシアにおける畑穀類の起源と伝播

前田和美（高知大学農学部）：アジア農耕とマメ

応地利明（京都大学文学部）：西南・南アジア農耕とムギ・雑穀農法

保志 恂（東京農業大学農学部）：華北農耕とムギ・雑穀農法——比較農法  
論の視点

氏原暉男（信州大学農学部）：ユーラシア大陸と日本のソバ

寺沢 薫（奈良県立橿原考古学研究所）：日本初期農耕段階の食素材と雑穀

野本寛一（静岡県教育委員会）：わが国の雑穀と焼畑の民俗

第1日目に最初の5題を、そして第2日目の午前中に残る2題の話題提供を行なうこととし、続いて午後に総合討論の場を設け、問題の整理と掘り起こしの場とした。総合討論の司会には渡部忠世と高谷好一があたり、ディスカサントとして、大林太良（東京大学教養学部）、佐々木高明（国立民族学博物館）、佐原眞（奈良国立文化財研究所）、古川久雄（京都大学東南アジア研究センター）の参加を要請した。

## (2) 話題提供の概要

前述したように、7つの話題提供のうち、前田、寺沢、野本による3つの報告は本号に収められているので、他の4つの話題提供について内容の簡単な紹介をしておこう。なお、本号に掲載した3報告は、当日の記録に話題提供者が一部加筆訂正したものである。

まず第一の報告、阪本による「ユーラシアにおける畑穀類の起源と伝播」では、畑穀類をユーラシア起源の冬作穀類と夏作穀類、そしてアフリカ起源でユーラシアに導入された夏作穀類の3群に分けたあと、各群の作物それぞれについて、その形態や栽培立地を示す豊富なスライドと共に、起源と伝播の問題が報告された。

冬作穀類はオオムギ、コムギ、エンバク、ライムギなどのムギ類であるが、これらは西南アジアに起源し、「ムギ農耕」と呼ばれる穀類をベースにした農耕が「肥沃な三日月地帯」で約一万年前に成立し、紀元前2,500年頃までにユーラシアの主要地域に広がったことが、過去の研究成果に基づいて紹介された。

ユーラシア起源の夏作穀類については、キビとアワがまずとりあげられた。その地理的起源地については、従来の中国北部という通説に対して、中央アジアからインド亜大陸にわたる地域とする考えを、今までに明らかにされてきたこれら作物の地域的分布の広さや、新たな考古学的資料、そして阪本ら自身によって行われた遺伝的変異パターンの分析結果などで実証しつつ、説明した。キビ、アワに続いては、東南アジア大陸部起源のハトムギの簡単な説明があったあと、ヒエの起源地の問題がとりあげられた。結論を紹介すると、栽培ビエにはニホンビエとインドビエの2種があって、それぞれが独立に栽培化されたこと、そしてニホンビエについては、日本が栽培の起源地であることが示された。また、ユーラシア起源の夏作穀類として、インド亜大陸には一般に知られていないマイナーな雑穀類がかなりあって、地域によってはまだ重要な役割を果たしていることが紹介された。

アフリカ起源の畑穀類、モロコシ、トウジンビエ、シコクビエについても、伝播と地理的分布が詳しく報告された。そしてこれらアフリカ起源の作物が、インド亜大陸ではユーラシア起源の夏作穀類にまして重要な位置を占めるようになったこと、あるいは日本にもトウジンビエを除いて古くから導入されていることなどが報告された。

第二の話題提供者である前田の報告は本号に収録されているので、次に第三の応地による「西南・南アジア農耕とムギ・雑穀農法」を紹介する。まず、対象となる地域を報告者自身のフィールドであるイランからデカン高原までとし、そして対象とする時代は“緑の革命”以前、あるいは非灌漑の慣行農業の時代とするという限定付けを前おきにして、対象地域の気候特性や作物分布特性がまず簡潔に紹介された。すなわち、対象地帯が等しく半乾燥地帯であるとはいえ、アフガニスタンやイランを中心とするムギの卓越する冬雨型地帯、そして

パキスタン・インド国境からインド北部の雑穀の卓越する夏雨型地帯、および同じく雑穀の卓越するデカン高原の夏冬雨型地帯に区分された。なお、同じ雑穀卓越地域であっても、夏雨型ではモロコシとトウジンビエが、夏冬雨型ではモロコシとシコクビエが主要作物となることも指摘された。

このような区分に従って、「ムギ農耕」と「ミレット農耕」の特徴が比較されたが、その比較にあたっては、作物—耕圃—耕地の3つのレベルが設けられた。作物レベルでは、各作物に対してどういった栽培・加工技術が適用されているのかという農作業体系の問題が扱われ、耕圃レベルでは、一筆耕地内での作付順序や作付様式が、そして耕地レベルでは、村というひとつのユニットの中での土地利用の空間配置の問題が扱われた。それぞれのレベルの問題について詳しく紹介する余裕はないが、簡潔に両農耕の違いを要約すれば以下になるろう。

まず作物体レベルにおいては、「ムギ農耕」では乾地農法システムが適用されるのに対して、「ミレット農耕」では犁よりも耙が発達して土壌の碎土が重視され、畜力条播・混播、畜力中耕・除草、施肥量の増大、粒食にともなう調製・加工技術など、乾地農法ではみられない農作業システムが成立していることが指摘された。そして耕圃レベルでは、休閒を排除した作付体系が「ミレット農耕」で成立しており、しかも混播・混作によって、一毛作とはいえず時空的な耕地の有効利用が実現され、多毛作的な効果を追求する農業が成立していること、そしてこれは「ムギ農耕」にはみられないもので、世界で最も発展した「ミレット農耕」の姿を示すものであることが強調された。そして第三の耕地レベルにおいては、「ミレット農耕」が村を中心とする同心円的な土地利用空間をもつことが示され、このパターンはラジャスタンや西アフリカ、エチオピアなどの他の雑穀栽培地域でみられる特徴であることが指摘された。

第四の話題提供、保志による「華北農耕とムギ・雑穀農法—比較農法論の視点」は、現地調査を主とした応地の報告とは対照的に、古代の華北農業の姿を伝える『齊民要術』を主な素材として、華北農法の特徴を報告した。

まず従来のこの問題に関する研究のレビューのあと、農法論の分析視角とし

て単なる風土論としての人間の適応の問題として捉えるのではなく、主体の歴史性をもつと強く主張する農法論の必要性が唱えられ、古代の華北畑作農法を集大成した『齊民要術』を研究する意義が語られた。

『齊民要術』農法の特徴としては、休閑を排除した雑穀・ムギ・マメを組み合せた輪作方式が成立し、作付順序に細かい配慮がなされていること、また農機具の面では、畜力条播機の使用、秋耕の際の土壌反転と深耕をめざした犁べらをもつ梓型犁の発達、そして土壌表面からの蒸発を抑えるための耙などの碎土用具の発達など、華北乾地農法の特徴を示す畜力用具による作業体系が『齊民要術』で確立していることが説明された。一方、中耕除草については、手耨耕が主体で、これがアジア的農法の特徴として稲作作業体系にも受け継がれていったことが指摘された。

このような『齊民要術』の農法的特点が西欧のローマ農法などと比較して、畜力犁利用、あるいは畜力中耕などの面で異なった展開を遂げたことが示され、この差異が鉄の生産体制における両者間の違いに由来するとの考えが提出された。自由な鉄の生産体制のもとで独立自営農民が形成されたローマに対して、首長制のもとに鉄の生産・流通が管理された中国や日本では、畜力農機具の発展が阻害され、手耨耕への展開が生じたとの考えである。こうして、鉄にかかわる問題を農法史研究でも今後とりあげる必要のあることが強調された。

そして最後に、現在の中国の農法問題に関連して、極端なまでの多毛作的展開が今後の農法の発展方向として果たして妥当であるのかどうか疑問が呈され、その意味でも、合理的輪作を説いた『齊民要術』に常に立ち戻って農法問題を考えることの意義が述べられた。

五番目の話題提供は、氏原による「ユーラシア大陸と日本のソバ」である。ソバは日本の初期農耕と東アジアの農耕とをつなぐ重要な作物としてとりあげられたが、まずソバの作物学的な特徴と世界におけるソバの種類や分布についてスライドをまじえながら紹介された。

ソバは栽培学的にみると、イネ、ヒエ、キビ、マメなどと比べて多くの弱点をもちながらなお栽培されてきた興味のある作物である。生態型としての種類



分け、たとえば、花の色、粒の形、葉の形、茎の色などには細かく見れば違いはあるが、大きな差はないこと。標高、緯度などに対しても幅の広い適応性をもつ作物であること。秋型、夏型、中間型といった作季はある程度基本的な遺伝的性質によるものであること。救荒作物あるいは備蓄作物として重要な作物として扱われていること、などが他の作物とは異なる点として指摘された。

また、ソバの作物栽培上の特徴として、生育期間が短く、したがって、置換作物、補填作物、あるいは救荒作物といった性格をもつこと。初期生育が盛んで雑草の生育を抑える、アレロパシーに近い意味をもつこと。授精結実率が低いこと。転流効率が悪いこと。脱粒性が大きいこと。気象災害に弱いこと、などから割合に作りにくい作物である反面、作付体系にうまく組みこめば便利な作物であることなども詳しく説明された。

さらに、ソバの調理、利用形態を整理して全粒、引割り、粉に大別し、ソバゴメ、ソバ粥、ソバガキ、クレープ、チャパティ、麺など各国での料理法が紹介された。

最後に、古代におけるソバ栽培の一般的意義と、日本への伝播・導入などの問題に示唆が提供された。

第2日目の午前は、寺沢および野本による話題提供と続いたが、この2報告は本号に掲載されている。また、その午後は総合討論が長時間にわたって行われたが、前述した理由によって、この紹介は略しておくことにする。編集部としては、他日、今回のシンポジウムの論点を含めて、より総合的、より本格的な討論が会員各位の協力をえて実現することを心から期待していることを、最後に是非つけ加えておきたいと思う。